大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

自由民権運動家の文法書

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2016-04-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 山東, 功
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002575

自由民権運動家の文法書

山東　功

一・はじめに

一八八二（明治一五）年四月六日、岐阜で自由党党首の板垣退助が暴漢に襲われる事件が発生した。この時に板垣が発したとされる「板垣死すとも自由は死せず」という言葉は、今日でも広く知られている。実際には「板垣は死すとも自由は亡びませぬぞ」であるとも、また別人の言葉が当人のものとして伝えられたという説もあるが、その真偽の程は詳らかでない。しかしながら、この言葉が人口に膾炙した理由の一つに、板垣とともに全国遊説に加わった、多くの民権運動家の活躍があったことは注目しておいてよいだろう。早くも四月一三日には、岐阜で自由主義を謳う政談大演説会が開催されており、「板垣死ストモ自由ハ亡ビズ」と題する講演が行われていた。この講演者こそ自由民権運動家の小室信介（一八五二～一八八五）である。過酷な封建的支配に対抗して戦った百姓一揆の指導者たちを生き生きと描いた『東洋民権百家伝』（一八八三（明治一六）年）は小室の代表的な著作であり、自由民権運動の広がりを見せるなか、多くの読者を得た。板垣の名言は、小室ら民権運動家の演説のなかで浮かび上がってきた、象徴としての意味合いが強い。

ところで、名言の流布に大きな影響を及ぼした、小室その人について、現在ではあまり注目されることがない。柳田泉の研究などに詳しいように、小室は「案外堂（案外坊）」の号で多くの政治小説を著しており、政治小説研究史において必ず言及される人物ではある。また、それ以外の事績についても、自由民権運動を牽引した、京都府宮津の政治塾「天橋義塾」設立への尽力や、慶應義塾での熱心な勉学の程（在塾当時の「勤惰表」では「出席割合一〇〇」であったという）[1]など、特筆すべき点が多い。自由民権運動の雄として、小室の名はもう少し取り上げられてもよ

い。

さらに、その小室が丹後の豪商小室信夫の養子となる前、小笠原長道と名乗っていた頃、洋文典に依拠した日本語文法書（洋式日本文典）を著していたことは、日本語学史において、ほとんど言及されることもない。拙著（二〇〇二）では、地方教育者の文法教科書に関する章で、一応、小笠原長道について扱っていたものの、品詞分類法について軽く触れる程度であったため、具体的な内容はあまり言及できなかった。また、小笠原長道が小室信介と同一人物であったことも、不明の致すところであるが、詳らかにできていなかった。

本稿は、自由民権運動家である小室信介が、本格的な活躍をなす以前に著した文法書について紹介し、その内容について検討を試みるものである。

二、小室信介（小笠原長道）について

小室信介の事績については、新しいものでは和田（一九八五）における年譜や、慶応義塾史事典編集委員会編（二〇〇八）の項目（「小室信介」の項）が詳しい。これらの記述によると、一八五二（嘉永五）年七月二一日に宮津藩士小笠原長縄の次男として誕生（幼名鋕吉）、一八六七（慶応三）年に藩学礼譲館助教、一八七〇（明治三）年には藩費生として京都の儒者山口正養に師事している。一八七二（明治四）年一〇月、京都府綴喜郡井出村小学校教師に就任するも、一八七五（明治八）年五月に辞職、以後、民権運動史上にも名高い、天橋義塾の創立に携わることになり、同年八月、天橋義塾結社人として開業願に名を連ねる。また、岩滝村出身の豪商小室信夫の長女さき（幸・幸子）との婚姻により小室姓となり信介と名乗る。ところが、翌一八七六（明治九）年に上京し、六月、小室信夫が保証人となり慶応義塾に入塾する。翌年に西南戦争が勃発すると宮津へ帰郷するが、ここで他の天橋義塾の指導者たちと共に、国事犯の嫌疑を受け、一時拘留されてしまう。柳田（一九六七）によれば「自由民権を名とした一大反政府運動」を起こそうとしていたらしいが、真偽の程は確かではない。ただ、ほどなく釈放され、一八七九（明治一二）年には大坂日報（後に「日本立憲政党新聞」と改名）の社員となり、以後、自由民権運動の雄として関西各地を遊説することになる。小室が広めた板垣の名言も、この頃の活躍のなかでのことである。

小室の活躍は全国遊説だけに留まらなかった。一八八三（明治一六）年から翌年にかけて、各地で収集した義民の事績をまとめた『東洋民権百家伝　一名日本義人伝』を著し、大いに好評を博

す。また、一八八四（明治一七）年に、星亨の出資により創刊された『自由燈』（じゆうのともしび）の特派員として清国に渡るなど、ジャーナリストとしても活躍し、さらに「案外堂」の号で政治小説も多く発表している。

一八八四（明治一七）年には、甲午事変処理の任に就いた井上馨外務卿・全権大使の渡韓に際し、外務省准奏任御用掛として随行する。こうした行動が同志たちから政府寄りと見なされ、無節操との批判を受けることもあったようである。そして、韓国滞在中に盲腸炎を悪化させてしまい、翌一八八五（明治一八）年六月に帰国するも、八月二五日に亡くなってしまう。三四歳の若さであった。明治前期という自由民権運動の時代を、疾風怒濤に駆け抜けていった人生であったといえよう。

ちなみに、郷里の天橋義塾は小室の死に呼応するかの如く、主導者や賛同者の多くを欠く事態へと陥り、一挙に衰退の道を歩むことになる。一八八五（明治一八）年の府立宮津中学校設置に伴い、校舎等も引き渡され、一八八七（明治二〇）年には解散するに至る。これには、自由民権を主張する私塾の抑制という、当時の政府の対応とも大いに関係していた。

ところで、小笠原姓の時期を含めて、小室の主要な著述については、以下のものが挙げられる。(2)

一八七四（明治七）年　『大日本夜話』（「小笠原長道」著）
一八七六（明治九）年　『日本小文典』（「小笠原長道」著）
一八八三（明治一六）年　『東洋民権百家伝　一名日本義人伝』
一八八四（明治一七）年　『東洋義人百家伝』二編（帙）
一八八四（明治一七）年　『東洋義人百家伝』三編（帙）
一八八四（明治一七）年　『異綺談夢恋々』
一八八四（明治一七）年　『自由艶舌女文章』
一八八五（明治一八）年　『第一遊清記』

『東洋民権百家伝』以降のものは先に述べた通りであるが、小笠原長道の時期における著作について、もう少し触れておくことにする。最初の著作である『大日本夜話』は、次に見る『日本小文典』と同じく、小室が井出小学校の教員として赴任していた時期に著したものである。内容は、日本のあるべき政治体制として存在する天皇中心の国体観を、初学者へ啓蒙的に説いている。後に見る自由民権運動への邁進からすれば、大きくかけ離れた内容であるが、少なくとも政治意識への萌芽と社会教育への関心は、相応にうかがい知ることができよう。

三、『日本小文典』について

『日本小文典』（以下「本書」）は、一八七六（明治九）年一〇月に刊行され、序（一丁）、本文（三十丁）、跋（一丁）からなる和装本である（著者名は養子に入る前のため「小笠原長道」であるが、便宜上、以下の引用では「小室」で統一する）。現在、CiNii Booksには東京大学総合図書館所蔵本のみ掲載されているが、他に国立国会図書館所蔵本が確認できる。内容はほぼ同一であるが、刊記は次のように若干異なっている。なお筆者架蔵本は両蔵本とも刊記が若干異なっており、刊本については少なくとも三種類存在することになる。(3)

〈国立国会図書館本〉

明治九年一月廿日出版版権御願
同　年二月十日版権免許
同　年十月廿日刻成発兌
豊岡縣士族
著　者　小笠原長道
丹後國與謝郡宮津十三大區壱ノ小区栁縄手六番地
京都府平民
出版人　川勝德次郎
下京第十三區寺町通綾小路下ル中之町五百六十六番地
定價十錢

〈東京大学附属図書館本〉

明治九年二月十日版権免許
同　年十月廿日刻成発兌
豊岡縣士族
著　者　小笠原長道
丹後國與謝郡宮津十三大區壱ノ小区栁縄手六番地
京都府平民
出版人　川勝德次郎
下京第十三區寺町通綾小路下ル中之町五百六十六番地
京都府平民
同　今井七良兵衛
同　區寺町松原上ル京極町四百九十八番地

本書の構成は以下の通りである。

序（紀元二千五百三十五年七月　丹後国宮津　粟飯原曦光）(4)
第一章　総論

第二章　文字学
五十音図　片仮名
濁音図
次清音
父母字相合フテ子音ヲ生スル図
第三章　言辞学
名詞ナコトバ／形容詞サマコトバ／代名詞カヘコトバ／
動詞ハタラキコトバ／副詞ソヘコトバ／
接続詞ツナキコトバ／後詞アトコトバ／歎息詞ナゲキコトバ
第四章　名詞
第一　普通名詞／第二　固有名詞／第三　無形名詞／
第四　集合名詞／第五　動詞状名詞
名詞ノ性（男性／中性／女性／普通性）
名詞ノ単複（単称／複称）
人称（第一人称／第二人称／第三人称）
名詞ノ格（第一格／第二格／第三格／第四格／独立格）
第五章　代名詞
第一　人代名詞
人称（第一人称／第二人称／第三人称）
単複（単称／複称）
格（第一／第二／第三／第四）
第二　疑問代名詞
単複（単称／複称）
格（第一／第二／第三／第四）
第三　指示代名詞
第六章　形容詞
第一　普通形容詞／第二　固有形容詞／
第三　物数形容詞（順序数／定数／不定数）／
第四　動詞状形容詞（現在／過去／未来）／
第五　集合形容詞／第六　疑問形容詞／
第七　結尾形容詞〈ムスブサマコトバ〉
第七章　動詞
他動詞（能動／受動）
自動詞
動詞活用（四段之活／中二段之活／下二段之活／
一段之活／三段之活）
助動詞
動詞法（直説法／命令法／接続法／疑問法）
動詞時限（第一現在〈メノマヘノコト〉／
第二現在一名半過去／第一未来〈イマヨリノチノコト〉／

第二未来／過去（クワコ）（モハヤスキサリタルコト）

第八章　副詞

第一　通常副詞／第二　位地副詞／第三　時刻副詞／

第四　決定副詞／第五　否不副詞／第六　疑問副詞／

第七　発語副詞／第八　集合副詞

第九章　後詞西洋ニテコレヲ前置辞ト云フ

第十章　接続詞

第十一章　歎息詞即感詞一名間投詞

跋（明治八年第七月　宮津学校教員　粟飯原鼎・杉浦鉄二郎）

品詞分類法などからもうかがえるように、本書は洋式日本文典（洋文典に範を求めた日本語文法書）の一種であることがうかがえる。具体的には、他の洋式日本文典を参考にして編纂されたものであると考えられるが、これについては後述する。

総論において「日本古来ヨリ備リタル言辞ノ学ハ只仮名ノ用格活用言ノ霊妙ナルトノミニテ西洋ノ如ク詞ノ品類ヲ種分スルモノニアラズ故ニ西洋諸家ノ法式ヲ抜萃シコレヲ日本語ニ照準シ其大略ヲ示サントス」（一丁ウ～二丁オ）として、主として洋文典に範を求めたことを述べている。さらに、当時刊行の諸文典を参考にして編纂した旨が次のように記されている。

輓近予ト仝憂ノ士少ナカラズ皆書ヲ著シテ文典ノ法式ヲ示スモノアリ然レドモ多クハ煩ニ過キ記臆シヤスカラズ世人大抵其旨ヲ覚ラズ或ハ以テ牽強付会セルモノトナス故ニコノ書只其大意ヲ示シ他日日本人ノ言語稍其正ヲ得ルニ及デ詳細ナル編ヲナサントス　（二丁オ）

「多クハ煩ニ過キ記臆シヤスカラズ」と述べている点は、教育現場にいた小室自身の率直な感想であったのだろう。特に洋式日本文典の場合、外国語（蘭語、英語など）の記述を無理に日本語へ当てはめたことから、例えば名詞の項で性（男性名詞・女性名詞・中性名詞など）の区別を論じるなど、煩瑣に映る記述が多く見られた。

ここで、明治前期の文法教育に教科書として用いられたものについて見ていくと、一八七二（明治五）年の学制発布当初には小学教則に「当分欠ク」とされていた文法科も、徐々に教科書も刊行され、曲がりなりにも教育体制が整っていったことがうかがえる。一八七七（明治一〇）年の「文部省第五年報」所収「小学教科書一覧表」には、以下の文法書が挙げられている（刊行年順に改めて掲出）。

一八〇八（文化五）年刊　本居春庭『詞ノ八衢』

一八七〇（明治三）年刊　古川正雄『知恵（ママ）ノ環』

一八七四（明治七）年刊　田中義廉『小学日本文典』
一八七六（明治九）年刊　中根　淑『日本小文典』
一八七六（明治九）年刊　中根　淑『日本文典』

本居春庭の『詞八衢』を除く全てが洋式日本文典である。本書は一八七六（明治九）年刊行であるが、序文や跋が一八七五（明治八）年のものであることから、『絵入智慧の環』と『小学日本文典』が、本書に先行する主要な文法教科書であると言える。そして、内容から見ても、両書は本書と密接な関係にあることが分かるのである。(5)

本書の品詞分類では「名詞ナコトバ／形容詞サマコトバ／代名詞カヘコトバ／動詞ハタラキコトバ／副詞ソヘコトバ／接続詞ツナキコトバ／後詞アトコトバ／歎息詞ナゲキコトバ」の八品詞をたてているが、これは次のように『絵入智慧の環』と同一である。ちなみに『小学日本文典』は、助詞に相当する「後詞」を立てていないため、七品詞分類である。

『絵入智慧の環』	『小学日本文典』
なことば（名詞）	名詞（ナコトバ）
かへことば（代名詞）	形容詞（サマコトバ）
さまことば（形容詞）	代名詞（カハリコトバ）
はたらきことば（動詞）	動詞（ハタラキコトバ）
そひことば（副詞）	副詞（ソヘコトバ）
あとことば（後詞）	接続詞（ツギコトバ）
つなぎことば（接続詞）	感詞（ナゲキコトバ）
なげきことば（歎息詞）	

一方、各品詞の下位分類の項では、『小学日本文典』と共通する記述が多くみられる。

名詞では「名詞ノ性」として「男性、中性、女性、普通性」の四種を立てているが、『小学日本文典』でも「男性、女性」の別を説いている。ただ、これらの点については、後に中根淑の『日本文典』（一八七六（明治九）年）において「日本ニテハ（中略）大抵ハ両性ニ通ジテ用フル者アリ」（三三丁オ）として、積極的な区分が不要であると指摘されるようになる。さらに、名詞に加えて代名詞においても、格を四格（第一格、第二格、第三格、第四格）まで認めている。これは古田（二〇〇二a、二〇〇二b）でも明らかなように、『小学日本文典』が大庭雪斎訳の蘭文典『訳和蘭文語』（一八五六（安政三）年）を範としているためで、その意味で本書は、蘭文典（正確には蘭文典の翻訳書）の流れをくむ洋式日本文典であると言える。

形容詞については、国学における「形状言」の記述とは異なり、活用形も示されず「名詞ノ模様性質ヲ明スモノニシテ大抵名詞ノ

上ニアリ」（一六丁オ）として、洋文典の記述と同じものとなっている。ただし、形容詞・形容動詞の終止形については「結尾形（ケツビ）容詞〈ムスブサマコトバ〉」として「冷ナリ」「明ナリ」「白シ」「寒シ」などを挙げ、「詩文和歌俳諧ナドニ多ク用ウ」（一八丁オ）としている。

動詞の「法」と「時限」の箇所について見ていくと、「動詞法即文法ナリ」では「直説法／命令法／接続法／疑問法」を挙げ、「動詞時限」では「第一現在（ケンサイ）〈メノマヘノコト〉／第二現在一名半過去／第一未来（ミライ）〈イマヨリノチノコト〉／第二未来／過去（クワコ）〈モハヤスキサリタルコト〉」としている。『小学日本文典』では、それぞれ「不定法／直説法／命令法／接続法／疑問法」「第一現在／第二現在（半過去）／過去／第一未来／第二未来」と、おおよそ共通している。なお「法」について『入綜智慧の環』では「つねのいひかた／つなぐいひかた／いひつけのいひかた（命令法（めいれいほふ））／つきぬいひかた（不定法（ふぢやうほふ））／うちけすいひかた」とあり、時は「めのまへのとき／こしかたのとき／ゆくさきのとき」としている。

副詞については「通常（副詞）／位地／時刻／決定／否不／疑問／発語／集合」の八種を認めているが、『小学日本文典』では「位地（副詞）／時刻／反覆／順序／分量／状態／決定／否不／種分／併合／推量／疑問／発語」の一三種である。また、接続詞についても本書では「其品類ハ許多アレドモコレヲ分ツトキハ煩シクテ初学者ノ容易ク記得スル所ニアラザレバ暫ク之ヲ省ケリ」（二八丁ウ～二九丁オ）としているが、『小学日本文典』では「合連／決定／原回／位地／区分／反対／設有／取捨／説明」の九種に分類している。さらに「歎息詞」においても「歎息詞ハ人ノ歓喜忿怒悲哀恐懼等ニ因リテ覚エズ発シ出ル処ノ詞ナレバ各国皆大ナリ相違ナキモノナリ」（二九丁ウ）として、「コノ種類モ暫クコレヲ別タズ」（同）として下位分類を行っていない。なお、『小学日本文典』では「歓喜／悲哀／驚嘆／忿怒／鎮止／勧励／賞讃／希望／召呼／発笑及び哭泣」と一〇種に分類している。

巻末には「猶委クハ中文典ニ説キ示サン」（三〇丁オ）とし、さらに「中文典ニ略セルモノハ又大文典ニ載セ遂ニ日本文典ヲ大成セント欲スルナリ」（三〇丁ウ）とあるが、実際に「中文典」や「大文典」は著されなかった。

以上のことから、本書が『入綜智慧の環』や『小学日本文典』の影響を受けたものであることが分かるが、こうした内容は地方教育者が著したものに多く見られた。拙著（二〇〇二）でも示したように、春山弟彦の『小学用日本文典』（一八七七（明治一〇）年）や、安田敬斎の『日本小学文典』（同）などがこれにあたる。ただ『小学日本文典』は洋文典への依拠度合いが大きかったため、先述の

ように、煩雑な説明が批判されることも多かった。一八七六（明治九）年刊行の中根淑『日本文典』には、具体的な書名こそ示されていないものの、『小学日本文典』における品詞分類法やその説明について、例えば「日本ニテハ、名詞ノ中ニ格ヲ設クルコトナキナリ」（上巻三三丁ウ）というように、批判的な記述が見られる。一方、本書では、「小文典」という性質も関係しているが、名詞の格や副詞の分類など『小学日本文典』とほぼ同じ内容であるように、文法記述に対する批判的検討まではなされていない。その点で、明治前期の洋式日本文典全般に見られる、洋文典摂取の段階という特徴をそのまま表したものと、本書を位置づけることができるだろう。

ただ、その意義はともかくとして、独自の説明への試行錯誤と思われる個所も存在する。「名詞ノ性」において「男性、中性、女性」までを立てる文法書は多いが、「普通性」を挙げているものは少ない。この「普通性」は「男ニモ属ス可ク女ニモ属ス可キモノ」（一一丁オ）として「親、子、孫、童、朋友、師、弟子、君臣、獣、鳥」などの例を挙げている。また、他動詞の項では「能動受動ノ別アリ」（一八丁ウ）として、それぞれ「能動即ハタラキカケ」「受動即ウケミ」という術語を用いているが、「ウケミ」という語の使用例として注目される。(6) 本書からは、小文典という形態ながらも、文法記述に対して多くの模索を試みていたことを見て取ることができるのである。

四．『日本小文典』と天橋義塾
―おわりにかえて―

一八七五（明治八）年八月、小室（小笠原）は豊岡県に「天橋義塾開業願」を提出する。この開業願には、天橋義塾での教則が示されており、初年時の「作文」科の授業では「日本文典ヲ用ヰテ名詞形容詞等ノ諸品詞ヲ授ケ、又私用文ノ復文ヲナサシム」(7) とある。また、同年一〇月に同じく豊岡県へ提出された「天橋義塾塾則」付載「天橋義塾仮課業表」にも、「下等五級」における「作文」科に「日本文典／私用文復文」と示されている。(8) そもそも天橋義塾は、既設の宮津学校内に小学余科の名をもって設けられた学校で、開塾時生徒の多くは一五歳前後であった。また、天橋義塾の社員には小室をはじめ学校関係者や、小学教員を志望する者が多かった。塾則にも「該塾ハ人材培養ハ論ナシ、小学教員ヲ保護シ民権ヲ暢達スルガ為ニ創立スルモノナリ」（第一章）とあり、私立学校において教員伝習を行うという主意がうかがえる。

こうしたなかで、小室が文法書を著したと考えると、本書の特

質が少しばかり見えてくる。本書の刊行は翌年の一八七六（明治九）年であるが、天橋義塾開業願が提出された一八七五（明治八）年八月の一月前に、粟飯原曦光の序と、粟飯原鼎・杉浦鉄二郎による跋が書かれている。序や跋の存在から見て、少なくとも一八七五年内には脱稿されていたはずであり、このことから本書は、天橋義塾における作文（文法）の教科書（参考書）として準備・編纂されたのではないかと考えられるのである。ただ、塾則や仮課業表には「日本文典」とあることから、実際には既刊の文法書も用いられた可能性は否定できない。(9) そうとすれば、先に示した「中文典ニ略セルモノハ又大文典ニ載セ遂ニ日本文典ヲ大成セント欲スルナリ」という文言は、『小学日本文典』といった既刊の文法書に満足できなかった、小室の熱意の表れと見ることもできよう。

ところで、天橋義塾の蔵書のなかには、ピネオの英文法書（*Pinneo's Primary Grammar of the English Language for Beginners.*）が複数含まれている。(10) ここで、ピネオの英文法書が主に慶應義塾で使用されていたという事情を念頭におけば、天橋義塾開業の翌年に小室が上京し、慶應義塾の門を叩いたというのも、何やら因縁めいた話ではある。自由民権運動への目覚めは、文法書によってもたらされた、とまで言ってしまえば、牽強付会の誹りは免れ得ないけれども。

注

（1）慶応義塾史事典編集委員会編（二〇〇八）六六八頁（「小室信介」の項）。

（2）原田（一九七二）には小学教員時期の著述として、他に『小学綴字詞乃枝折』、『地球儀用法大意』が挙げられているが、後者は勝沼和多留編『小学地球儀用法大意』（一八七五（明治八）年）のことで、小室が記しているのは解題のみである。また『小学綴字詞乃枝折』については、『日本小文典』の序に「著小学詞枝折」という文言があり、『御新来以京都新刻書目便覧』（一八七四（明治七）年）にも掲載されているが、所在については確認できなかった。

（3）筆者架蔵本の刊記は以下の通り。「明治九年一月廿日出版権御願／明治九年二月十日版権免許／同年十月廿日刻成発兌／豊岡縣士族著者　小笠原長道／丹後國與謝郡宮津十三大區壱ノ小区柳縄手六番地／京都府平民／出版人　川勝德次郎／下京第十三區寺町通綾小路下ル中之町五百六十六番地／京都府平民／同　今井七良兵衛／同　區寺町松原上ル京極町四百九十八番地」

（4）粟飯原曦光（一八三四～一九一一）は天橋義塾教員として、沢辺正修や、本書に跋を寄せた粟飯原鼎（一八四六～一九一九）、杉浦鉄二（次）郎（一八四九～一九一九）らと共に義塾創立に参画した国漢の教師で、後年、京都府高等女学校教諭に就いている。詳細については、宮津市文化財保護委員会・宮津市教育委員会編（一九七八）、宮津市史編さん委員会編（二〇〇一、二〇〇四）などを参照。

（5）当然のことながら、両書以外の文法書を参照していた可能性も否定できない。そもそも、一八七二（明治五）年発布の「小学教則」には、具体的な文法書名を欠いているものの、「名詞、後詞、様詞、代詞、動詞、接詞、副詞、歎詞」について教授することが示されていた。山田俊三『山田氏文法書』巻の一（一八七三（明治六）年）では、形容詞を「様詞」としているように、小学教則中の品詞名をそのまま反映した文法書も存在するからである。

（6）この「能動・受動」における「ハタラキカケ、ウケミ」の記述について、斉木・鷲尾（二〇一四）では、大槻文彦による「受身」訳述以前の例として挙げられている。ただ、一八七四（明治七）年五月刊行の渡邊約郎『日本小文典』にも、「他動詞ニ於テ二ノ種類ガアル、一ニ曰ク為スコトノ種類、乃チ働キカケノ詞、二ニ曰ク任ユルコトノ種類、即チ受ケ身ノ詞」（一二丁オ・ウ）という記述が見られる（渡邊の『日本小文典』の方が、本書よりも二年先行している）。本書が渡邊の『日本小文典』を参照したかは明らかでないが、少なくとも明治前期に「受身（受ケ身、ウケミ）」が、それまでの英文典の翻訳（例えば斉木・鷲尾（二〇一四）でも指摘されているように、一八七〇（明治三）年の永嶋貞次郎『ピネヲ氏原板英文典直訳』など）とは別に、日本語文法書の術語として使用されていたことは間違いない。

（7）宮津市史編さん委員会編（二〇〇一）三〇八頁。

（8）宮津市史編さん委員会編（二〇〇一）三一三頁。

（9）確かに、天橋義塾の蔵書を継承した宮津市立図書館には、本書（六冊、内一冊には「教場用」の墨書有）と『小学日本文典』が所蔵されている。この点に関して宮津市立図書館へ問い合わせたところ、旧蔵書は宮津市歴史資料館収蔵庫に保管されているが、二〇〇七年四月以降、同資料館が休館中のため閲覧不可とのことであった。また、同志社大学図書館の小室・沢辺紀念文庫には、小室の旧蔵書が多く収められているが、本書のような日本語文法書の類はほとんど含まれていない（確認できるのは、堀秀成『日本語学階梯』（一八七七（明治一〇）年）のみである）。

（10）書目については住谷（一九六四）を参照。ピネオの英文法書の他には、スウィントンの英文法書（*New Language Lessons. An Elementary Grammer and Composition, By William Swinton.*）が見られるが、これは一八八七（明治二〇）年刊行のものであることから、後に混入したものであろう。

参考文献

慶應義塾史事典編集委員会編　二〇〇八　『慶應義塾史事典』慶應義塾大学出版会

斉木美知世・鷲尾龍一　二〇一四　『国語学史の近代と現代―研究史の空白を埋める試み―』開拓社

沢村　秀夫　一九五七　「自由民権運動の私学「天橋義塾」」「同補遺」『郷土と美術』五七、六一

山東　功　二〇〇二　『明治前期日本文典の研究』和泉書院

住谷　申一　一九六四　「天橋義塾と沢辺正修―とくに明治十三年を中心に―」『人文学』（同志社大学人文学会）七三

同志社大学図書館編　一九九一　『小室・沢辺紀念文庫目録』同志社大学図書館

原田久美子　一九七二　「自由民権政社の展開過程―天橋義塾の場合―」『資料館紀要』（京都府立総合資料館）一

古田　東朔　一九五八　「明治以後最初に公刊された洋風日本文典―古川正雄著『絵入智慧の環』について―」『香椎潟』（福岡

女子大学）四（鈴木泰・清水康行・山東功・古田啓編（二〇一〇）『古田東朔　近現代　日本語生成史コレクション第4巻　日本語　近代への歩み―国語学史2―』くろしお出版、所収）
古田　東朔　一九六〇　「『小学日本文典』の拠ったもの―明治初期洋風文典原典考3」『解釈』五・三（鈴木泰・清水康行・山東功・古田啓編（二〇一〇）所収）
古田　東朔　二〇〇二a　「明治前期の洋風日本文典」『国語と国文学』七九・八（鈴木泰・清水康行・山東功・古田啓編（二〇一〇）所収）
古田　東朔　二〇〇二b　「『訳和蘭文語』から『小学日本文典』、『日本文典』へ」近代語学会編『近代語研究』第一一集、武蔵野書院（鈴木泰・清水康行・山東功・古田啓編（二〇一〇）所収）
望月　久貴　二〇〇七　『明治初期国語教育の研究』渓水社
柳田　泉　一九六七　『政治小説研究　上巻（明治文学研究第八巻）』春秋社
和田繁二郎　一九八五　『案外堂小室信介の文学』和泉書院
宮津市史編さん委員会編　二〇〇一　『宮津市史　史料編　第4巻』宮津市
宮津市史編さん委員会編　二〇〇四　『宮津市史　通史編　下巻』宮津市
宮津市文化財保護委員会・宮津市教育委員会編　一九七八・一九七九『資料・天橋義塾　上巻・下巻』宮津市文化財保護委員会・宮津市教育委員会

付記

原典の引用に際し、漢字は適宜、通行の字体に改めた。なお、本稿は科学研究費補助金による研究成果の一部である。

（さんとう　いさお・本学教授）